- 16** ミノマイシン服用後に遊走性紅斑が出現したライム病の1例
中沢 馨 (中沢外科)・○ 内川公人 (信州大)
A case of Lyme borreliosis that developed after treatment of
tick-bite with minomycin
Nakazawa K. and Uchikawa, K.

患者: YR, F, 35才, 看護婦, 松本市 (800m) 在住。経過: 1995年6月23日に左側腹部に寄生するマダニに気づき、夫が抜去するも口器残存。翌24日受診。切開して残存虫体を除去、ミノマイシン4日間内服投与。7月5日にマダニ咬着部に紅斑が出現したため、翌6日に再受診。10 cm x 5 cm の円形紅斑と発熱 (37.7 °C) を認め、ライム病を疑って採血と病変部の生検をおこない、抗生剤をジョサマイシンに切り替える。その後順調に回復して今日に至る。検査結果: 血清検査ではMCATのみ陽性 (160倍)。培養でボレリアは検出されなかった。臨床所見と血清検査成績から、患者はライム病を発症したものと診断された。考察: マダニ咬症に抗生剤を投与したにもかかわらず遊走性紅斑が出現した珍しい症例であり、いろいろな問題を提起している。

- 18** 長崎地方におけるオオクロバエの生活史
○倉橋 弘 (予研・昆虫), 末永 敏 (長大熱研, 資料室)
Life history of *Calliphora nigribarbis* Vollenhoven in Nagasaki Pref.
Kurahashi, H. and Suenaga, O.

長崎県五家原岳 (1, 058 m) の異なる標高の3地点 (A: 諫早市西里町, 標高5 m; B: 片木町, 標高500 m; C: 山頂, 標高1000 m) でオオクロバエの生活史の調査を5年間行った。年間の成虫出現消長は雌雄とも3地点で春と秋に出現のピークの見られる2山型を示し、その出現消長は秋から春にかけて連続した。雄の秋の山は春に比べ少なかった。A, B地点では夏 (6-9月), C地点では9月には雌雄とも捕集されなかった。捕集された雌の翅破損度は1月にどの標高でも最大となり5-6月に向かって減少した羽化トラップの成績では3-7月にかけて新成虫の羽化が見られたことから、この間で世代の交代が起こっているものと考えられる。山頂C地点で夏の間に捕集された雌の翅破損度は6月から1月に向かってほぼ同じ傾向で増大し、個体群のエージが進んでいることが推定された。交尾雌率, 卵巣成熟雌率は秋から冬にかけて同じ様に高い値を示し、個体群の雌が成熟し産卵態勢にあることを裏付けた。山頂C地点では交尾雌率も成熟雌率は春から秋 (9月) までゼロを示し、羽化した幼若な雌は未交尾で卵巣休眠して越冬していることがわかった。10月に成熟を開始し、秋から冬にかけて高い%を示した。山頂では夏の間、わずかに成虫がトラップに捕集されたものの、飛翔活動は観察されなかった。越冬場所については残念ながら今回もどのような場所で隠れて越冬しているのか観察できなかった。

- 17** 日本未記録のミナミカドマルハヤトビバエ属の1新種 (双翅目・ハヤトビバエ科)
林利彦 (国立予研・昆虫医科学)
Discovery of the genus *Pachytarsella*
from Japan and its new species
Hayashi T.

Pachytarsella ミナミカドマルハヤトビバエ属 (新称) は現在まで世界で2種のみが記載されている。

P. pachypus (Richards) はハワイ及びニューギニアから、*P. boharti* (Richards) はグアム・パラウから記録されている。

演者は1993年に沖縄でハヤトビバエ相の調査を行なった際に本属の1種を採集し、新種であったので報告する。本属の特徴は翅中室の後縁が丸くなっており、額間剛毛 (if) が1対だけ発達する。また属名 *Pachytarsella* とあるように既知の2種は附節が肥厚し、これが属の特徴の1つとされていたが、沖縄産の新種は肥厚していない。この形質は必ずしも本属の特徴とはならない事が分かった。日本からの本属の発見はその起源を考える上で貴重な情報と思われる。

- 19** マダニの人体咬着輸入例 (2) ○山口 昇
(埼玉医科大学短大), 中島康雄 (山梨医大), 大友弘士
(慈恵医大), 西山明雄 (東京都中野区) Ticks im-
ported on human body (2) N. Yamaguti, Y. Nakajima,
H. Ohtomo & A. Nishiyama

本年2月に、ネパール観光旅行に参加した日本人3名 (男性1、女性2) が、ネパール産マダニに膝毛部、耳殻部、鼓膜に咬着を受けてそのまま帰国し、帰宅後に近医で摘出を受けた。虫体を検査した結果は、属不詳の若ダニであったが、演者の手元で生存していた2個体が4月に脱皮し、カクマダニ属 (*Derma-centor*) の1種であることが判明した。鼓膜に刺咬を受けた1人はその後原因不明の発熱と関節痛を発現したが、直接マダニ刺症との関係は不明であり、ライム病抗体価はマイナスであった。標本を精査したところ、マダニ口下片は鼓膜に挿入されており、耳道にはダニの糞と思われる異物も見られ、鼓膜から吸血できることが確認された。一般人が安易にツアーに参加し、日本で未知の感染症に罹患する恐れは、今後も増大することが予想される。